おてら

秋彼岸法要会

先祖への供養は私への供養

九月十九日～二十五日

二十二日（日・祝）
彼岸中日法要
午前十一時より

二十三日（月・振休）
永代経法要
午後七時より

お彼岸中にお墓参りをしましょう
ご本尊様にもお参りいたしましょう

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

写経会
毎月第二・四火曜日
午後一時より

己の使命

住職　蒲原霊英

七月に東京のお盆巡教に参った折、靖国神社に参拝して、戦没者や軍事関係の資料を収蔵・展示している「遊就館」を初めて見学して来ました。丁度、近年立て続けに、一〇一歳になる祖父に海軍軍医だった時の体験を語る取材があったので、特に特攻機や戦闘機等をこの目で見ておきたいと思ったからでした。ご維新から日清・日露戦争までだけでもかなりボリュームが有り、じっくりパネル展示や映像等を見ていたらすっかり時間が経ってしまい、大事な大東亜戦争の所が駆け足になってしまいましたが、最後の大展示室で人間魚雷「回天」やロケット特攻機「桜花」等を見ることができました。おそらく祖父が見送った特攻機ではないのですが、いずれにしても特攻で使われた物を目の前にすると、自分と同い年や年下なのに、片や死ぬことがほぼ確定して出撃して行き、片や軍医であるのでこれからも生きることがほぼ確定して見送るという、何とも残酷な日常が在ったことに思いを馳せると涙が出そうになりました。

私達は摩訶不思議なご縁をいただき、必ず一人ひとり使命を持って、皆仏の子としてこの娑婆に生まれさせていただきます。そして、その使命が終われば、阿弥陀様に「ほら、還って来いよ」と言われて、もっと生きていたくても、泣く泣くお浄土参りさせていただかなければなりません。逆に、もうよっぱら（新潟弁で「もう十分」）になっても、まだ己の使命が終わっていなければお浄土参りさせてもらえません。皆さん「長生きしたい」とおっしゃいますが、一〇一歳になる祖父と九十七歳の祖母を見ていると、なかなかどうして長生きするのも大変そうです。とは言え、お浄土参りに近づいている二人を見ていると、最近頓に、おそらく祖父の娑婆での使命は、いくら心身共に辛くても長生きして戦争の悲惨さや愚かさを語り継ぐことで、祖母の使命は、その祖父を側で支えることなのだろうと思えて来ました。多分片方が欠けても駄目なのでしょう。

兎角年を取ってから段々と自分の使命とは何だったのかが分かるようになるのかもしれませんが、皆年を取るまで生きられるとは限らないので、なるべく早めに自分の使命とは何なのかをしっかりと考えて生きていく方が良いと思います。そうすれば、紆余曲折、多少苦しいことや大変なことが身に起こっても、「すべていただいて来たご縁であり、己の使命には欠かせないことなのだ」と、ありがたく受け取らせていただくことができるでしょう。そして、少しは楽な気持ちで生かさせていただくことができるのではないでしょうか。　合掌

新盆法要

八月三日夜七時から、護持会主催の新盆法要が営まれ、県内外から多くの方々が参拝されました。

参拝者の方々は、開式前に献灯し、読経中にご法名が読み上げられると順次焼香。住職による法話の後、記念品とお供物の下付がありました。

もしかしたら今まであまりお寺にご縁の無かった方も、自分の大切な方が亡くなり悲しいご縁ではありますが、この仏縁をいただいて、改めてこのいのちの尊さやこうして様々なご縁の中で生かされているありがたさ等に気付かれたことでしょう。

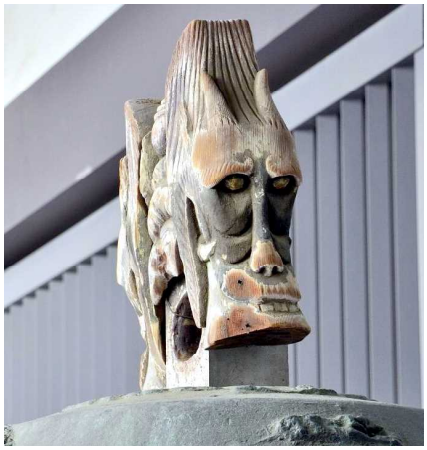
縁有って一緒に新盆を迎えられた亡き方々を偲びつつ、皆で感謝のお念仏を申させていただきました。

西本願寺の七不思議 番外編

梵鐘

江戸時代前期の元和四年（一六一八）に建立された鐘楼には、平成八年に鋳造された二代目の梵鐘が吊るされていますが、重要文化財の初代の梵鐘は平成十年頃まで実際に使用されており、その後安穏殿に展示されていましたが、平成三十年からお茶所に展示されています。

刻まれた藤原通憲入道信西の銘によると、この梵鐘は元々、京都太秦広隆寺において久安六年（一一五〇）の火災によって焼失した鐘の代わりに再興された物で、『広隆寺由来記』に見える永万元年（一一六五）六月十三日再興供養の願文の記述から、この頃に造られたものと思われます。降って室町時代天文十六年（一五四七）、広隆寺から石山本願寺へ代銀二三〇貫文（約三千万円）で売却され（『天文日記』）、さらに石山本願寺退出に際し元和六年（一六二〇）に西本願寺へ移されました。当時は華洛の名鐘として知られていたようで、『山州名跡志』等の地誌類や洛中洛外図屏風等にも登場します。当初の竜頭（釣鐘を梁に吊るすための釣手）は失われて、近世に木彫で補われましたが、木製の竜頭は非常に珍しいものです。

そこで、この珍しい木製の竜頭については次のような伝説があります。「この梵鐘は聖徳太子が鋳造させて太秦広隆寺に吊られていたが、ある日竜宮まで通ずるという底なしの池に沈んでしまった。鐘を東寺の人が無限の綱で引き揚げたら、鐘から竜頭が外れてしまった。やむなく東寺の人は竜頭だけを大切に持ち帰った。その後、鐘が本願寺に行きたいと訴える夢告があり、太秦の人が釣り上げて本願寺に運ぶも、竜頭がないので鐘楼に吊れないために困っていた。するとそこへ老女が現れ、老婆が手にしていた自作の木製の竜頭で吊られたが、危うげに見えたために鐘の下に台を据えたという」。梵鐘は平安時代に再興されたので話に齟齬がありますが、この竜頭を誰がいつどうして木で作ったのかはよく分かっていないようなので、このような伝説が生まれたのかもしれません。

梵鐘は銅製で、高さ約158.2cm・口径約106.4cm・重さ約1.8ｔ。音色は黄鐘調（雅楽の六調子の一つ）。竜頭は、竜の頭が彫られた木が２個合わさってできている。